

## 論文内容の要旨

氏名	陳 懌懿
論文題目	世界の女性文学に見る Siblings 像と多様な女性像
要 旨	
<p>本博士論文は、イギリスとアメリカと中国という三国で、女性の社会的地位がドラスティックに変化する過渡期にあった三作家を取り上げて、その代表的作品の中で描かれた Siblings（本論では「姉妹」の意味で用いる）たちの性格の多様性が最も特徴的に表れている箇所と比較分析を行うことで、単純化されやすい女性像の多様性を描き出すものである。女性像の多様性の表出のされ方が国が違っても社会の変革期においては世界の文学で共通性が見られることを論じたものである。博士論文の要旨を以下に記述する。</p> <p>序章である第一章に続く第二章、Jane Austen と <i>Pride and Prejudice</i> では、イギリス人女性作家 Austen の作品 <i>Pride and Prejudice</i> に登場する二人の女性 Siblings(Elizabeth と Lydia)が論じられ、二人が違う生き方を志向する様が論じられる。継嗣相続が存在する年代には、女性が財産を持つ男性の妻になろうとすることは本作品では「真理」だとされるが、主人公の Elizabeth Bennet は当時の「真理」に疑問を呈する。当時の社会現実に対する不満を持って、社会的規範から自立する意識を持ち、自己を主張する積極性を備える。素っ気ない父親や、無教養な母親と妹たちを持つ Elizabeth は将来についての不安を大きくしたため、劣等感を抱いていた。しかしその劣等感を克服し強くなろうと無理をした Elizabeth は、自らを現実以上に優れた者と考える高慢に至ったため、身の回りの人々へ偏見も持つようになる。Collins 氏の自分への求婚の拒絶、親友 Charlotte と Collins 氏との結婚への軽蔑、Lydia と Wickham 氏の駆け落ちなどの顛末を経て、Elizabeth が数々の目覚めを経験したと論じる。そのため高慢な性格はなくなり、他人の考えや価値観への理解へと至る。Darcy 氏への偏見は尊敬へと変わり、さらには愛情に発展した。彼女は女性も理性と知性を持ち、精神的自立を持つとして、女性を劣位に置く偏見に不満を表明する。だが、Darcy に対しては、彼が愛情を金銭より優先し、「尊重」、「敬意」、そして「信頼」を Elizabeth に対して徐々に持つようになり、Lydia と Wickham の駆け落ちを解決したことを吹聴しない謙虚さなどの中に Elizabeth は Darcy の高度な美德を見た。Elizabeth と Darcy はお互いへの理解と愛情から、対等な関係の結婚へと至ったと結論付ける。</p> <p>その一方で、Elizabeth の妹の Lydia は成長しない内的愚かさを持ち、それは小説内で解消されないことが論じられる。自惚れ、家族へ無関心、無教養、そして過剰な自己満足などの性格上の欠点があるため、自分のみならず家族全体が嘲笑の的となり、Lydia の様々な愚かな行為によって家族が恥辱に陥る危険性をはらんでいる様が指摘される。例えば、10代の若さで男性を見抜く力のない Lydia は、不誠実な男の Wickham 氏と駆け落ちをすることで、自らの破滅と家族の汚名をもたらす事態を招来するが、Darcy 氏の金銭的・精神的助けによって、Wickham 氏との結婚を果たす。Bennet 一家</p>	

への破壊的要因である Sibling たる Lydia は、彼女を助ける Darcy の姿を Elizabeth に示すことで、図らずも Elizabeth の結婚への契機になったとも考えられる。

第三章では、アメリカ人作家 Louisa May Alcott とその代表作 *Little Women* における Siblings の中で三女の Beth March と末娘 March について主に論じられ、キャラクター的差違が指摘される。その前段階の議論として、ほとんど議論されたことのない Alcott の全作品の分析がされ、Alcott 像として一般に流布している「児童小説家」だけではない側面が指摘される。Alcott が児童小説の他に扇情小説を数多く書き、リアリズム小説も手がける多彩な作家であったことが指摘され Amy、当時の父権主義的な社会で女性の理想とされた「家庭の天使」に則した作品も残す一方で、Alcott の創造した女性人物のほとんどは、男性中心主義的で伝統的な生き方に従わず、男性が賛美する理想の女性像を転覆させ、女性に抑圧的な社会に挑戦し、波瀾万丈な人生を送っている姿で描かれていることが指摘される。この意味で古 Alcott の作品群が、古い社会から新しい女性の活躍する転換期に特徴的なものであることが示される。

*Little Women* の Beth と Amy という姉妹(Siblings)の二人にも Alcott の多彩さが反映しており、対照的なキャラクター作りがなされている。Beth は Alcott によって「我らが家庭の天使」と描写されるが、20 代前半で夭折する。彼女は婚約者、嫁、母親の身分を経験したことがなく、Beth の人生の特徴を表す用語として、論者は「非典型的な家庭の天使」という概念を提唱する。Beth は優しく、人々に感謝の心、共感力、責任感を持ち、無私の精神で家族や周りの人々を愛している。猩紅熱にかかったために、体が日々衰弱し、Beth は自分が長生きできないと感じたが、死に対して恐怖心を持たない。Beth は様々な美德を有し、皆に愛され、自己に忠実に生きようとしていた人物だと結論付けている。

一方、末娘の Amy だが、「家庭の天使」という伝統的な女性観を打ち破ったのはこの作品で最も有名なヒロインである勝ち気で創造力に富んだ Joe だけではなく、偉大な芸術家になりたいという野望を抱いている末娘の Amy もそうであったと論じ、あまり議論されることのない本キャラクターに脚光をあてている。幼少期の Amy は虚栄心を持ち、利己的で自惚れやすい女性だったが、様々な経験を積み重ねて、善意を持ち、人々に愛される女性に成長したと論じる。Amy は芸術家になりたいという夢を抱き、それを実現するため努力をし、叔母の援助でヨーロッパ旅行を行い、直に芸術に触れる機会を得る。ただ、最高の芸術に触れる中で、Amy は自分が芸術の天才ではないという自己認識に至る。そこで、ほかの才能を磨き、社会に貢献したいという気持ちを持つこととなる。このように成長を果たした Amy の中に、「新しい女性(New Woman)」像を読み取ることができると論者は主張する。また、Amy はヨーロッパ旅行の途中、旅行パートナーの裕福な Fred に求婚されたが、愛していない相手と自らの意思に反して結婚できないと考え拒絶する。その一方で、Amy は容貌や金銭より、人の内面性に目を向け、共通の趣味と美德を持つ Laurie を愛し、結婚する。容貌や金銭以上に重要なことは、男性の持つ人間性だと

Amy は考えた。Laurie と結婚後も、Amy は個として、「本当の自己」に執着する。芸術活動を趣味として続けるだけでなく、夫の Laurie と同じように、社会的責任感を持ち、芸術の夢を抱く若者を助ける。この夫婦は、対等で平等の関係にあると言える。Alcott は Amy を通して、伝統的なステレオタイプ、すなわち「家庭の天使」を破り、模範的「新しい女性」像を示した。家庭、仕事、そして夢などをよく調整し、男女におけるステレオタイプに陥らず、夫婦が生活や将来について熟考し、共に自由に生きることのできる社会は Alcott が理想とする社会なのだ、と結論付ける。

第四章では、あまり議論されることのない、アメリカに亡命した中国人女性作家である張愛玲(Eileen Chang)の『半生縁』(*Half a Lifelong Romance*)が論じられる。この作品における Siblings は顧家の長女である顧曼璐(コマンルー)と妹の顧曼楨(コマンジェン)である。父親の死後、家族を養うために、長女のマンルーは夜の商売を始める。愛のない結婚をしたものの、長年売春婦をしたため妊娠できない身体となり夫の不満を解消するために、妹マンジェンをだまして夫と関係させて子どもを産ませるといふ悪行に走る。マンルーは絶望の中で亡くなるが、彼女の人生は、様々な失敗に満ちていた。家族の扶養のために恋人と別れ売春婦となったこと、愛していない男性と生活の経済的安定のために結婚したこと、夫のためとはいえず妹に悲劇的犯罪を行ったことなどだ。「愛」という前提を「生存」に切り変えたのである。マンルーは自分の幸せと妹の幸せを犠牲にして、男性を優位に置こうとした。その意味で、この女性像は古い男性中心的価値観に沿ったものであると論じる。その一方、マンルーの妹のマンジェンの生き方は異なっており、「新しい女性」と「理想的な女性」の特質を持つと論者は主張する。

マンジェンはマンルーに騙されてマンルーの夫の暴行を受け出産し、1年間監禁される。その間に恋人であった男性は別の女性と結婚しており、姉同様悲惨な前半生を送る。監禁から逃れて働いていたマンジェンは姉の病死を知り、無理矢理産まされたマンルーの夫との間にできた息子ではあるが、母親としての責任を取り、嫌でたまらなかった姉の夫と結婚し、息子の世話をする。放蕩を尽くす夫を見て、ここに至ってマンジェンの自由を希求する気持ちが沸き上がり、苦勞して離婚を勝ち得てからは、自分の意志を第一に考える人生を送るに至るが、孤独な生活に耐えなければならない。そもそも最初の恋人であったセキンという男性を愛していたにも拘わらず求婚を断った理由は、夫に頼るという父権主義的な関係を嫌ったため、マンジェンは女性としての独立心を重要視する「新しい女性」的特質を持っていた点が、姉のマンルーと決定的に違っている点だと指摘する。ただ、伝統思想の呪縛から逃れようとする新しい女性としての生き方を貫くことは困難であり、セキンの求婚を断る過剰な自己主張によって、結果的に彼女は悲惨な人生を歩むことになるわけで、伝統的男性中心主義社会の束縛からの解放がいかにか難しいかということ、この「新しい女性」像を求めたマンジェンの中に作者は描いたのだと論者は結論付ける。

## 論文審査の結果の要旨

氏名	陳 懌懿
論文題目	世界の女性文学に見る Siblings 像と多様な女性像
要 旨	
<p>本論文は近世の世界文学（アメリカ文学・イギリス文学・中国文学）の小説を、そこに見られるキャラクターたちの中でも Siblings、特に姉妹キャラクターという観点に焦点を絞って分析した博士論文である。三つの国の文学のみを論じることによって、「世界文学」というパースペクティブを語り尽くすことはできないが、論者は、近世イギリス文学においては Jane Austen(1775-1817)、近世アメリカ文学においては Louisa May Alcott(1832-1888)、近世中国文学においては張愛玲(1920-1995)に着目し、この作家たちの生きた時代に各国が旧来の父権主義的な社会から女性の自立が始まる過渡期にあったことにより、論者の定義づける「新しい女性」像、「理想の女性」像が出現する兆しが見られること、そして、そのような新たな社会的価値観の現出にもかかわらず、旧来の価値観を引きずる女性やそこから脱出できない女性も描かれることに関心を持ち、具体的作品の精緻な分析により、その有様や意味について論証を行っている。</p> <p>論者の結論を纏めると以下ようになる。Austen の <i>Pride and Prejudice</i> においては、初めは高慢であった Elizabeth が成長して「新しい女性」として自立する一方で、愚かしさを克服できなかったその妹 Lydia は Elizabeth と対極にあるが、その決定的な誤りが、結果として姉 Elizabeth の結婚への道を開く。その意味でこの二人の Siblings は、やはり強い関係を持っていて、お互いを必要としていたとも言える。Alcott の <i>Little Women</i> においては、おとなしくて病弱な Beth の静謐が救いとなって、Amy などが女性としての自立性を確立することを助けている。Lydia とは全く性質が違ふ慈愛に溢れる Beth は夭折するが Amy らの成長を後押ししたという意味で、Siblings 同士の強い繋がりが示されている。張愛玲の『半生縁』においては、マンルーという姉はけなげに家族や夫を支えようとする伝統的価値観のもとで行動するのだが、伝統思想にあまりに強く縛られたが故に妹のマンジェンを決定的な打撃を与える悲劇に陥れる。被害者である妹マンジェンは、男性中心主義社会からの自立を目指す志を持っていたが、それがために恋人の求婚を断り、悲劇的人生を歩むことを余儀なくされる。マンジェンが間違った結婚を解消してからは自立の道を進むが、孤独な生活を送らざるを得ない。この二人の Siblings には他二作品 <i>Pride and Prejudice</i> と <i>Little Women</i> に比べて遙かに絶望感が漂っているが、二人の Siblings は価値観を異にするが故に、お互いを傷つけあうという意味においてそれだけ濃密な関係性を持つということも言える。</p> <p>Siblings は本論においては姉妹という意味に限定されており、同じ家庭環境で育てられ、一見価値観や世界観において近似的であることが想定され、従来研究でもこれらの作家における女性像は単純化される傾向があったことを批判する。そして、</p>	

Siblings であるからこそ、社会の変革期において、彼女たちの生き方が特徴的な差違を示すことを、それぞれの作家の作品を徹底的に読解することで証明する試みである。このように複数の国を横断して女性自立の機運が起こった時代の Siblings についての研究は希有であり、大きく評価できる。Siblings には兄弟の意味もあり、兄弟の研究においては、例えば岩田美喜の『兄弟喧嘩のイギリス・アイルランド演劇』(2017)など優れた研究があるが、姉妹文学を論じた先行研究は少なく、野心的試みと言える。もう一つ特筆すべき本研究の優れたところは、中国の張愛玲という、魯迅をも凌駕すると評価されながらも等閑視されていた女性文学者を本格的に論じた点であり、さらにそれを広く研究がなされている Jane Austen から欧米女性文学者と比較の俎上に載せた論文はおそらくこの論文が世界で初めての試みとなり、大きく評価できる。

以上、本研究は、世界文学における Siblings 像を分析することで、各国で女性が社会的自立をする時期がそのありさまは異なるとはいえ、その転換期に書かれた女性作家の小説において、多様な女性像を示すことを立証し、また新旧の価値観への反応がそれぞれの Siblings で異なることを示し、それにも拘わらず Siblings たちが互いに濃密な関係性を持つことを示した極めてユニークな研究である。ただ、世界には無数の Siblings 小説が存在するわけで、本研究はそれらの広大な研究領域の先鞭をつけたわけだが、論者においては、さらに対象を広げて広く深くこの研究を持続する努力が必要であろう。

#### 審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	服部典之
副査	教授	伊東治巳
副査	教授	近藤富英

最終審査の結果の要旨

氏名	陳 懌懿
試験科目	
判定	合格・不合格
要 旨	
<p>学位申請者の研究成果を確認し、審査するため、博士論文を中心に口述試験を実施した（2023年1月26日）。</p> <p>申請者は、本研究において、文学作品の読解方法を熟知し、三作家 Jane Austen と Louisa May Alcott と張愛玲の全ての作品を読破することで、絞られた三作品の読みがさらに深いものになっている。社会における新旧の価値観の転換期の作家と作品の取舍選択も適切であり、特に中国人作家の張愛玲を徹底的に分析した研究としては、極めて貴重で、この作家の再評価をも促す嚆矢ともなりうる優れた論考である。本論文の研究成果の一部は、日本英文学会関西支部での口頭発表（査読有）や、二つの論文として公開されている。前者については、特に高い評価を受けた。</p> <p>申請者の外国語の試験については、日本語により執筆された学位論文と日本語、英語、中国語の要約における高い表現力と理解力から判断し試験を免除した。</p> <p>以上の諸点を総合し慎重に判断した結果、審査委員会は、本博士論文に対し全員一致で博士（言語文化）の学位授与を適格と認め、合格と判断した。</p>	

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	服部典之
副査	教授	伊東治巳
副査	教授	近藤富英